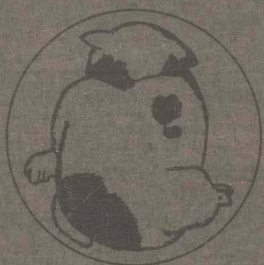


南総里見八犬伝

三

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店



南総里見八犬伝

三

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店

南総里見八犬伝(目) (全一〇巻)

一九八五年一月一六日 第一刷発行 ©

定価二六〇〇円

校訂者 小池藤五郎

発行者 緑川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
鉄 岩波書店

電話 〇三・六五・四二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・文勇堂

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-004313-7

解 説

『南総里見八犬伝』の九十八巻百六冊は、左の通りややこしい分け方になっている。

肇輯ちやうしゅうから第五輯までは各輯ともに五冊。第六輯（六冊）。第七輯（七冊）。第八輯上帙・第八輯下帙（おのおの五冊）。第九輯は、上套（六冊）、中套（七冊）、下套上・下套中・下帙之下甲号・下帙之下乙号上套・下帙之下乙号中套・下帙下編上・下帙下編之中下・結局編上・結局編下（いずれも五冊）のごとくである。

第五輯までの二十五冊を山青堂（山崎平八）が出版したが、遂に版木を涌泉堂（美濃屋甚三郎）に譲った。第六輯を刊行した涌泉堂は金に困り、文溪堂（丁子屋平兵衛）の助力を得て第七輯を出版したのみで終り、第八輯は文溪堂の出版するところとなった。文溪堂は馬琴の原稿を得て第八輯以下の刊行に努力すると共に、涌泉堂が大阪の河内屋長兵衛に売渡し、それが更に京都の人の手に移った第八輯以前の旧版本を買取り、自家の奥附おくつけを置いた文溪堂版の『八犬伝』を肇輯から七輯まで刷出した。馬琴と協力して『八犬伝』を完成した文溪堂の功績は誠に偉大である。

『八犬伝』の原本を考える時、既に山青堂・涌泉堂の出版した第七輯までの部分に、文溪堂が刊行した八輯以後の部分を加えた物を、私は第一原本と呼ぶ。文溪堂が買取った版木に手を入れて肇輯から摺出した文溪堂版の『八犬伝』を、私は第二原本とする。両原本の本文は全く同一で、

各丁の柱の書肆名も同様である。ただし第四輯巻之四に、巻之五は来年の春に出版する旨を記し、五本を四もとまつ見する冬の花ひと木は春へさきのことなり

と山青堂主人の狂歌が添えてあるのは第一原本、第二原本ではそれを削った程度の違いである。

第一原本では肇輯の表紙に白い子犬一匹が雪中で遊ぶ様を画き、見返しに「南総里見八犬士伝、曲亭主人藁本、柳川重信出像」の文字、白い子犬二匹、黒い子犬一匹が画かれてある。第二原本の肇輯の表紙は、雪中に子犬七匹が遊ぶ図で、袋には「里見八犬伝、曲亭主人著、柳川重信画、文溪堂梓、初輯」の文字を記してある。第二原本はしばしば第一原本の七輯以前の意匠を利用し、口絵などは第一原本のそれに薄墨を加え美化してあるが、その後摺は甚だしく粗悪になっている。

『八犬伝』の版本は明治になって和泉屋吉兵衛・兎屋等の手に移り、遂に博文館の所有となつて現存する。版木の所有者がその時々に出したもので、名山閣版・稗史出版社版・博文館版その他の後刷本が遺されてある。これらの後刷本の多くは、冊数を変じ、口絵を欠き、原本の体裁は見る由もない。原版本使用の最後は、明治三十年に刷出した博文館版の三十七冊本である。

帝室博物館鑑査官秋山光夫氏所蔵の第二原本は、珍しくも帙袋まで保存してある。この書は曾祖父助孝氏（八丁堀与力）が幼少の折、大人しく灸治を受けた褒美として父君より賜りし物とかわる。『八犬伝』の人気のほどを語る恰好な逸話であり、秋山氏の好意を深く感謝する次第である。

（昭和十二年十一月）

凡 例

一、校訂には『南総里見八犬伝』の初版本を用い、校正は毎回原本に拠って厳重に行った。

一、読みやすくするために、左の諸点に特色を持たせたほかは、全く原本通りにして置いた。

(1) 本文に段落を設け、詞には鉤(「」)を施し、仮名の濁点・半濁点は適宜に補った。

(2) 冒頭の漢文の序の繋符(一)を除き、目録は仮名交りに改めて本文中の回号に一致させた。

(3) 本文中に和歌・詩文・その他が挿まれている場合には、それを抜出して別行とした。

(4) 原本の文章はすべて句点(。)で切つてあるが、それを読点(、)・句点(。.)に分けて用いた。名詞を重ねた場合で、原文に句点がない時だけ、並列点(・)を附けて置いた。

(5) 原本中の文字・仮名づかいの甚だしい誤謬——例えば「城平[△]等」を「城兵[◎]等」に、「聡^そ察^{さつ}叡^{はい}智^ち」の「そうさつはいち」を「そうさつえいち」に訂正——は訂正して置いた。

(6) 原本の仮名づかいは「亡父^{ぼうふ}」・「滅亡^{めつぼう}」・「亀篠^{かめささ}」・「亀篠^{かめささ}」等の如くに、同一の文字についてもしばしば不統一である。かかる点は、むしろ時代の仮名づかいと、作者自身の特徴とを知る上から、原本通りにした。ただし「人物一覽」には多く用いられている方を振って置いた。

(7) 馬琴の特色ある文字使用法を保存するために、極力原本通りの漢字を用いた。ただし「也」・「敷」^{なり}その他を仮名書にした。「漁夫」^{ぎよふ}の如き場合には左側の片仮名のみを削った。
リヤウジ

〔編集付記〕

旧岩波文庫版『南総里見八犬伝』全十巻(小池藤五郎校訂、昭和十二・十六年刊)を改版するにあたって左の改変をくわえた。

一、旧岩波文庫版を底本とし、国立国会図書館蔵の初版本『南総里見八犬伝』(架蔵番号別三―一〇六一二)と対校して誤植などを訂した。

一、右国会図書館本により、旧岩波文庫版で省かれていた挿絵を余すところなく補った。

一、漢字は新字体を用いたが、仮名づかいは初版本どおりとした。

一、底本で使われている異体字のうち、辻・羣・晉・曾など、いくつかを通行の漢字(逃・群・腰・胸)に改めた。

一、読みやすさの便をはかって振り仮名の一部を省略したが、人名・地名などの固有名詞はこの限りではない。

一、底本の()は原本の割注を示しているが、今回これを〔 〕に改めた。原本の欄外注は「」に収めた。一、各輯の総目録は訓み下し文に改めたが、本文中の回号との異同は初版本のままとした。

(岩波文庫編集部)

話の筋(第三巻の分)

〔第五輯〕

悪漢の曝風は小気味良くも神霊に引裂かれたが、可愛い孫の親兵衛が神隠しに遭ったので、妙真はひどく悲しんだ。これより先に大塚へ赴いた信乃・現八・小文吾の三大士は、武蔵国神宮河原で稽平という漁夫に逢い、暮六一家の凶変、莊助(額蔵)が日ごとに拷問されていることなどを聞いた。七月二日庚申塚の刑場で莊助が死刑になろうとする時、躍り出た三犬士は、役人どもを射倒し斬倒して莊助を奪ったが、戸田河に追詰められて絶体絶命の危険に陥った。突如としてそこへ現れ出た稽平と、その子の力二郎・尺八郎の防戦と救助により、上野国荒芽山へ向かって遁れた。

道節は上野国白井城の扇谷定正を主君の仇と狙っていた。村雨丸を餌として定正に近づき、その首を取ったが、実は定正の臣の越杉駄一郎を討ったのであった。扇谷方は狼狽の極、偶然にもここに来合せていた信乃らの四犬士を、道節一味の者と思つて襲撃したので、四犬士は苦戦しつつ荒芽山の方へ退いた。荒芽山の音音は稽平の妻で、道節はここにかくまわれていた。戸田河で戦死した力二郎・尺八郎の首を稽平が荒芽山へ持ち帰った時、嫁の曳手・単節は、寢れた二人

の旅人を馬に乗せて戻って来た。この旅人こそは、結婚の当夜だけで別れてしまった曳手の夫の力二郎と、単節の夫の尺八郎の亡霊であった。白井城の追手は直ちに音音の家を包囲した。

〔第六輯〕

稽平夫婦は家に火をかけた。五大士も稽平夫婦も血路を開いて落ちのびたが、小文吾は曳手・単節を馬に乗せて立ち退き、遂に二人にはぐれてしまった。小文吾は、武蔵国阿佐谷村で獵人の並四郎を救い、その妻の船虫という毒婦に、千葉家の宝物嵐山の尺八を盗んだ賊であると訴えられたが、やつのことで身の潔白を証拠立てた。この嵐山の尺八と小篠・落葉の名刀は、千葉介自胤の家老の馬加常武が並四郎夫婦に盗ませて置いた物であった故、千葉家に小文吾が仕えるようになることが、馬加には恐れられてならなかった。そこで小文吾を敵の間諜と誣い、長く邸内に幽閉した。小文吾は常武の旧悪を知り、馬加に謀殺された千葉家の家老の忘形見——美しい女田楽師の旦開野——と偶然にも親しくなった。有名な対牛楼の仇討は、この可憐な美少女旦開野が、馬加の一家を斬りに研った凄絶な場面である。旦開野は実は男子で、犬士の一人犬坂毛野であることがわかり、共に城から遁れ出た。墨田河原で小文吾は毛野を見失い、独りで市川に帰って行った。

荒芽山で離れ離れになった犬士中の犬飼現八は、犬士の行方を尋ねて京都まで行き、帰り道に下野国庚申山の麓の茶店で、赤岩一角がこの山へ登ったことを聞いた。現八は道に迷って庚申山

へ登り、怪物の眼を弓で射た。更に登って一つの洞窟内で赤岩一角の亡霊に会い、怪猫に食ひ殺されたこと、今の一角は怪猫が化けた者であることなどを語られ、倅の角太郎（大角）を助けて仇を討ってくれとの依頼を受けて下山した。妻の雛衣との間を割かれ、草庵で味気ない日を送っている角太郎を現八は訪れ、彼も犬士の一人であると知った。現八は角太郎と雛衣の悲しい立場に同情し、互いに胸襟を開いて話していると、思いも寄らぬ角太郎の継母の船虫が訪れて来た。

主要人物一覽(第三卷の分)

猪平 イノヘ

姨雪世四郎 ハハユキよしろう

力二郎 リキじろう 尺八郎 しゃくはちろう

音音 おとね

丁田町進 ちやうでんまちのしん

仁田山晋五 にたまじんご

巨田薪六郎助友 おおたしんろくろうすけとも

越杉駄一郎遠安 こすぎだいちろうとおやす

曳手 ひくて 单節 ひとよ

神宮河原の漁夫。姨雪世四郎が世を忍ぶための仮の名。力二郎・尺八郎兄弟の父。

犬山道策の若党。音音の夫。後に荒芽山の麓で巨田薪六郎の一隊と戦った。与四郎とも書く。

世四郎の子。戸田河原で奮戦し、信乃・現八・小文吾・莊助(額蔵)等を救ったが、遂に戦死した。

姨雪世四郎の妻であって、力二郎・尺八郎の母。犬山道節の乳母。上野国荒芽山の麓に住み、犬山道節をかくまっていた。

武蔵国大塚の城主大石兵衛の陣代。戸田河原で力二郎・尺八郎に討たれた。

丁田町進の下役。援兵を率いて戸田河原へ駆付け、鉄砲で力二郎・尺八郎を討取った。

巨田持資の子。扇谷定正の臣。道節を捕えようとして荒芽山で信乃・小文吾・姨雪世四郎等と戦った。

定正の臣。池袋の戦で煉馬倍盛の首を取った。後に定正の身代りとなって犬山道節に討たれた。

姉妹であって、豊島の旧臣禿木市郎の娘。曳手は力二郎の妻。单節は尺八郎の妻。

根子平 ねごへい 丁六 ちやうろく顯介 けんすけ鷗尻の並四郎 おめしりなしろ船虫 ふなむし馬加大記常武 まくだいきつねたけ籠山逸東太縁連 こみやまいづらだよりつち栗飯原首胤度 あいはらのおとたねのり千葉介自胤 ちのすけよりたね品七 しなしち旦開野 あさけの○犬坂毛野胤智 いぬさかのたねとも卜部季六 うらべのすえろく依介 よりすけ

上野国荒芽山麓の村役人。道節を捕えようとして失敗した。

武蔵国阿佐谷村に住む悪漢。恩人の犬田小文吾を刺そうとして却って一刀両断になった。

並四郎の妻。毒婦である。夫を数人替え、諸処に移り住み、悪事の限りを尽した。千葉介自胤の家老。主家を横領せんとして忠臣栗飯原胤度を殺した。後に胤度の

子犬坂毛野(旦開野)に対牛楼で討たれた。

千葉介自胤の家老。栗飯原胤度を殺したので、後に犬坂毛野が武蔵国鈴森で仇を討った。

千葉介自胤の家老。馬加常武の奸計にかかり、籠山逸東太に殺された。

入道了心の次子。武蔵国赤塚の城主。後に兄実胤の所領を譲られ、石浜の城に移った。

馬加常武の僕。小文吾に常武の悪事を告げたために毒殺された。

女の服装をしてい、女田楽を業とするが、実は栗飯原胤度の忘形見の犬坂毛野である。

栗飯原胤度の妾の調布が産んだ子。八犬士の一人。

馬加常武の家来。主命により小文吾を暗殺せんとして、犬坂毛野(旦開野)に殺された。

山林房八の僕。見込まれて妙真の姫の水滸と結婚させられ、房八歿後の山林家を

鴟平 もちへい

赤岩一角武遠 あかいわいつかくたけとお

○ 犬村蟹守儀清 いぬむらかもりのりきよ
犬村大角礼儀 いぬむらだいかくまさり

雛衣 ひなぎぬ

繼いだ。

下野国網芋（足結）の狐人 あじが かうゆうと。庚申山麓の茶店の主人で、大銅現八に庚申山のことを色々と話した。

下野国赤岩村の郷士。犬村大角の父。庚申山中に深く入り、怪猫に喰殺された。

怪猫は長年の間一角に化け、一角の後妻の窓井に一子牙二郎を産ませた。

上野国大郷の郷士。雛衣の父。犬村大角の養父。

赤岩一角の正妻正香の子。幼名は角太郎。犬村儀清の養子となった。八大士の一
人。

犬村儀清の娘。大角の妻。

目 次

解 説

凡例・編集付記

話の筋(第三巻の分)

主要人物一覧(第三巻の分)

南総里見八犬伝(三)

八犬伝第五輯序

南総里見八犬伝 第五輯目録

第五輯卷之一

第四十一回

こしたやみ
木下闇に妙真依介を訝る
かにはわたりしのやすへいあ
神宮渡に信乃碁平に遭ふ

第四十二回

夾剪はさみを搦ひらふて犬田進退いねたを決さだむ
額藏がくざうを誣しひて奸党かんたう殘毒ざんとくを逞たくましう
す

.....
三

第五輯卷之二

第四十三回

群小ぐんしょうを射いて豪傑さはが法場はうばうを鬧さわす
義士ぎしを渡わたして俠輔けふ河水かみに投なむ

.....
四

第四十四回

雷電らいでんの社頭しゃとうに四萬しゆん會つ話もす
白井しらゐの郊外けがいに孤忠こちゆう讐あだを窺うかがふ

.....
五

第五輯卷之三

第四十五回

名刀なばうを売弄ばいろうして道節どうせつ怨うらを復かへす
窮寇きゆうこを追失おひうしふて助友敵すけともを換かふ

.....
六

第四十六回

地藏堂ぢざうだうに莊助さうすけ首級しゆけいを争あらふ
山脚村やまもとむらに音音おとね旧夫きうふを拒きやうむ

.....
一〇六

第五輯卷之四

第四十七回

莊助さうすけ三たび道節どうせつを試こす
双玉さうぎよく交まじ其主そのぬしに還かへる

.....
一三三

第四十八回

駄馬暗に両夫妻を導く
兄弟悲て二老親を全す

一四四

第五輯卷之五

第四十九回

陰鬼陽人肇て判然
節義貞操送て苦諫す

一六四

第五十回

白頭の情人合巻を遂ぐ
青年の孀婦菩提に入る

一八三

八犬伝第六輯有序

南総里見八犬伝 第六輯総目録

本輯全六本
終六十一回

第六輯卷之一

第五十一回

兵燹山を焼て五彦を走らす
鬼嬋馬を助て両孀を導く

二二三

第五十二回

高屋敷に悌順野豬を搏にす
朝谷村に船虫古管を贈る

二二六

第六輯卷之二

第五十三回

畑上はたがみあやまつ 謬いねたて犬田いぬたを捕とらふ
馬加まけ窃ひそかに船虫ふねむしを奪うばふ

四六

第五十四回

常武つねたけ疑うたがて一犬士いつけんしを囚とらふ
品七しなしち漫まろに奸臣かんしんを話説わせつす

二六二

第六輯卷之三

第五十五回

馬大記まだいき賺言たんげんして道みちに籠山こみやまを窮きうせしむ
粟飯原あひはらめつぞく滅族めつぞくせられて里さとに犬坂いぬさかを遺のこす

二六二

第五十六回

朝開野あさけの歌舞かぶして暗ひそかに釵兒かんざしを遺のこす
小文吾こぶんご諷諫ふうかんして高たかく舟水しゅうすいを論ろんす

二九五

第六輯卷之四

第五十七回

對牛樓たいぎゅうろうに毛野けの鬚あを塵みなごろしにす
墨田河すみだがはに文吾ぶんご船ふねを逐おふ

三二七

第五十八回

窮きう厄やく初はじめて解とけて転うつ故人こじんに遭あふ
老实主家ろうじしゆうかを続つづて旧憂きうゆうを報く

三三三